

「少年の主張全国大会」

「わたしの主張2020」

内閣総理大臣賞受賞作文

言葉を紡ぐ

鹿児島県 霧島市立横川中学校 三年

池島 音羽

「音羽ってさ、最近調子乗ってるよね。偉そうにさ。まじ、ウザい。」

それは、突然のことだった。冬が、静かに足音を忍ばせながら近づいてきたあの日。放課後の教室に冷たい風が吹き抜けた。息ができなかった。ただ、茫然と立ち尽くすしか。心の奥を鋭い刃物でえぐられる。無理に笑おうとすると、頬が引きつった。私、今、どんな顔してるんだろう。真っ白な世界にただ一人取り残された。頭の中に浮かぶのは、疑問だらけ。ついさっきまで、仲良く話してたよね。どうして。どうして私が。私、そんなに調子に乗ってたかな・何か、悪いことしたかな。その日からすべてが変わった。ひそひそ話をする友人の姿を見ては、その場から逃げ出した。怖かったから。きつと自分のことをいってるんだらうって思った。そそくさと教室を出る私の背中に浴びせられた言葉。

「ほんと何なのけ。ウザいんだけど。」

誰かに相談したくてもできなかった。相談したら、また何かいわれるんじゃないかとおびえる日々。ベッドに横たわって意味もなく天井を眺めた。頭の中の何かがプツツと切れた。気づいたら側に母がいて、私はすべてを打ち明けた。瞬きもせずに私の話を聞く大きな瞳に泣きじやくる私の姿が映っていた。

「今まで辛かったね。あんたはすぐに一人で抱え込む癖があるから、誰にも相談できなかったんでしょ。今、お母さんに言った気持ちをはんの少しでもいいから相手の子に伝えてごらん。何も変わらなかつたら、また、お母さんのところに戻ってきなさい。」

夕飯に出されたお味噌汁を一口すると、心の中に溜まっていた何かがふっと抜けていった。久しぶりに感じたこの暖かさ。でも、どうやって伝えたらいいの。直接、言える勇気なんて私にはない。だったら、どんな形であれ、自分の気持ちを伝えなきゃ。だって、私には帰って来られる場所があるんだから。

その夜、私はスマホを握りしめた。「LINEを開き、ずいぶんと更新されていない画面を見つめ、自分の思いをしたためた。何度も何度も文字を打ち直した。私が悪いのなら何がいけなかったのかを教えてほしいということ。陰で言われるのはとても辛いということ。送信ボタンを押す手が震え、どれだけの時間が経っただろう。これがきっかけで何かが変わるというんだろうか。」

翌朝、既読のサインは付いたが、返信はなかった。学校についてもいつもと変わらない

景色がそこにあった。「ごめん。」背中越しに聞こえた言葉。それは突然だった。伝わったんだ。少しづつ、私の世界に色が戻ってきた。「何か、気に入らないことがあったら、教えてね。」

途切れ途切れの私の言葉。

ステイブ・ジョブズ氏は「想いを形にして、想いを言葉にして、想いを伝達する。いくら素晴らしいものを作っても伝えなければいけないと同じ。」と語る。そのは諸刃の剣。時に人を傷つけるが、人を救うことだってある。世の中は情報化社会だ。これから先も、私たちは情報の渦の中で生き抜くことになる。何を学び、どんな力を身につけなければならぬか。今、文科省が勧める「GIGAスクール構想」。この目的は、一人一台のコンピュータと、一人一人の個性に合わせた学習の実現だと言われている。多くの情報を活用する力が私たちに求められているのだ。だが、その基盤にあるものは何だろう。どれだけ、情報化の波が押しよせようと、人間が人間としてあるためには、想いを言葉に紡ぎ、相手に伝えることではないか。そして、人と人がつながることではないか。新しい時代を築けるのではないか。帰宅した私を母が笑顔で迎えた。「何か食べたいものある。」

私は迷わず答えた。

「お味噌汁。飲みたい。」